


音順	生薬名	中医の性味・帰経	中医の用量
せー16	せっこう 石膏	辛・甘、大寒 肺・胃	15～60g、大量で120g、煎服。
中医生薬解説			
 <p>含水硫酸カルシウム鉱石</p>		清気分実熱 (清熱降下・除煩止渴) 外感熱病の気分証で高熱、煩躁、口渴があり、水分を欲する、脈が洪大などを呈するときに、 知母・甘草 などと用いる「 白虎湯 」。 気分証に血熱を伴った気血兩燔で紫黒色の斑疹を生じたときは、 犀角・生地黄・牡丹皮 などと用いる「 清瘟敗毒飲 」「 化斑湯 」。 気分証の回復期の余熱未清で、胸苦しい、口渴、舌質が紅、舌苔が少ないなどを呈するときは、 竹葉・麦門冬 などと用いる「 竹葉石膏湯 」。	
		清肺熱 肺熱の呼吸促迫、咳嗽、胸苦しい、口渴などの症候に、 麻黄・杏仁 などと用いる「 麻杏甘石湯 」。 清胃火 胃火熾盛による頭痛、歯痛、歯齦の腫脹疼痛、口内炎などに、 黄连・升麻・牡丹皮・白芷・細辛 などと用いる「 清胃散 」。 陰虚の胃火上炎による歯痛、頭痛には、 熟地黄・麦門冬・牛膝 などと用いる「 王女煎 」。	
		生肌斂瘡 創傷、潰瘍、熱傷などの肉芽新生が悪く、瘡口が塞がらないときに 煨石膏 の粉末を外用する。	
		参考 生用(生石膏)すると清熱瀉火に、煨いて用いる(煨石膏・熟石膏)と生肌斂瘡に働く。	
		使用上の注意 内服の場合は生石膏を粉碎して先煎し、徐々に温服する。外用には煨いて粉末にし、散布する。 大寒で質が重いので、実熱以外には使用してはならない。 胃寒食少には禁忌である。	
中医以外の生薬解説			
神農本草経	味辛微寒、中風、寒熱、心下逆氣、驚喘、口乾、舌焦、息する能はず、腹中堅痛、邪鬼を除き産乳金瘡を主さどる。		
薬 徴	主治は、煩渴也、旁はら譫語、煩躁、身熱を治す。 「方剤決定のコツ」の注釈 「譫語」は胃に熱を持つと発する。		
新古方薬囊	熱氣の泛亂を収め、陽氣の發散を助け、熱による刺激症状を緩解する能あるものの如し。 「方剤決定のコツ」の注釈 石膏剤気味は辛微寒で、抽出しにくい分量を多く用いることにより(白虎湯では16g用いる)、体表にトラブルがあって生じた身体内部の熱(内熱といい、裏の熱をいう)を冷やして、その熱のために生じる種々の症状を去る働きをなす。 刺激症状(煩躁など)を緩和させる場合には、5g以下を用い、例えば小青龍湯加石膏の石膏は2gを用い、石膏の煩躁に対する利用して緩解させる。 石膏の内熱は体表にトラブルがあって起こると考えられる。そのために刺激症状を取る。 内熱を緩和させる場合には、8～10gを用いる。 石膏剤で冷やし過ぎて、手足が冷えたり下痢をした場合には甘草乾姜湯で陽を益し、温めてやればよい。 参考 甘草乾姜湯は、上焦が虚して冷えているときに用いる。 人参湯(甘草乾姜湯+人参・白朮)は、甘草・乾姜の働きが中焦を温める。 苓姜朮甘湯(甘草乾姜湯+茯苓・白朮)は、甘草・乾姜の働きは下焦の冷えを温める。 石膏が配合された方剤の解説 白虎湯 太陽・陽明・少陽の合病で、表から裏に渡って熱がるが、特に陽明の証(腹が張って一杯になり、身体が重くて寝返りが出来なくなり、口嚔して小便を漏らし、自然に汗が出るなど)が強く出易い状況のときに、石膏は16gを用い、知母と共にその陽明の熱を去る。 知母は、表裏にこもっている熱を冷やして、気の流れをよくし、石膏は、肺氣が鬱熱のために力が弱まり、熱を内にこもらしているため、その熱を体外に出し、粳米は胃に力をつけ、發散する力を援助する。甘草は甘平で、脾胃を補い、急迫症状を緩める。 白虎加桂枝湯 太陽・陽明・少陽の合病で、表から裏に渡って熱がるが、特に体表の熱(脈は平常と変わり無く、身体に寒症状が無く、ただ身体が熱をもち、特に皮膚・筋肉に熱をもって、骨節がうずき苦しみ、悪寒はなく、ときに嘔気があるような温瘧)に用い、その体表の熱を發散させる。 参考 白虎加桂枝湯は、桂枝の働きで白虎湯の働きが主に体表の熱を取るように働く。 皮下に熱が過ぎると、癰腫(膿を伴う腫れ物)になる。 瘧病でも、柴胡桂枝乾姜湯の場合は、半表半裏に熱がこもり、内と外に寒が勝っている状態にあり、寒症状が多くて、微熱が有るか無いかという症状となる。 白虎加人参湯 太陽・陽明・少陽の合病で、表から裏に渡って熱がるが、特に陽明の胃に熱が入り、大煩渴、脈洪大となったもの。 参考 人参の作用で胃を保護して、白虎湯の働きが胃を中心に熱を取って行く。 太陽病で桂枝湯を服して大いに発汗し、脈洪大になったものには、桂枝二麻黄一湯を与えるが、この場合は表熱の脈洪大で、陽明胃の裏熱から生じる大煩渴は伴わない。		